

2022年度 大学院奨励研究員研究報告書

2023年3月10日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	任 霞	印
-----	-----	---

指導教員

所属・職名	言語コミュニケーション 文化研究科・教授	
氏 名	于 康	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	日本語受身文の誤用研究 —中国語母語話者日本語学習者を対象に—
採用期間	2022年 4月 1日 ~ 2023年 3月31日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

図書	著者名	任 霞	論文題目	(専 著)		
	書名	《日语被动句的偏误研究》 (日本語訳：日本語の受身文の誤用研究)		発行年月	頁	
				2023年8月	総頁：	担当箇所：

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日中対照言語学会	開催地	中国北京 北京理工大学 (オンライン参加)
題目	「受身文+ことができる」の誤用に関する一考察	発表年月日	2022年5月15日

学会名	日本語誤用と日本語教育学会	開催地	中国西安 西安外国語大学 (オンライン参加)
題目	中国語母語話者日本語学習者の「～化になる→～化される」の誤用に関する一考察	発表年月日	2022年8月1日

学会名	中国日本語教学研究会上海分会	開催地	中国上海 同濟大学 (オンライン参加)
題目	存在構文における「である」と「(ら)れている」の誤用に関する一考察	発表年月日	2022年10月29日

学会名	日本語学会	開催地	東京
題目	思考動詞の自発的受身の使用条件に関する一考察 —学習者の誤用を手掛かりに—	発表年月日	2023年5月20日

学会名	日本語教育学会	開催地	オンライン
題目	無情物主語受身文の誤用メカニズムの解明及びその指導法の提案 —学習者作文コーパスの誤用データに基づいて—	発表年月日	2023年5月28日

研究経過状況（3000字程度）

日中両言語において受身文の非対応現象はよく見られ、中国語では受身文が使用される場合に日本語では受身文にならない場合は少なくない。また、中国語で受身文が使用されない事態は、日本語では受身文を使用してはいけないことがよくある。このような非対応が原因の一つと考えられ、中国語母語話者日本語学習者にとって、受身文がなかなか習得しにくい文法項目となり、誤用が多発する。例えば「YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス」Ver. 11には受身文の誤用が2,696例観察された。学習初期段階の学習者だけでなく、学習歴が10年以上の日本語教員のデータにもよく観察される。誤用の現状を改善し、習得を促進するには、学習者の受身文の使用においてどのような誤用の傾向があるか、誤用がどのようなメカニズムで生じたかを究明する必要があると考えられる。そこで、本研究は大規模の学習者コーパスである「YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス」から抽出した受身文の誤用例を対象に、学習者の誤用傾向と誤用メカニズムを明らかにすることを目的として考察を行った。具体的な研究手順は以下の通りである。

- i 学習者の受身表現に関する誤用例を抽出し、一般化可能な説明を目指し、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞という動詞分類法を踏まえ、学習者の受身文の誤用を分類した上で、誤用の傾向を明らかにする。
- ii 母語話者の内省による判断のみならず、日本語母語話者コーパス、中国語母語話者コーパスなどを利用し、より豊富な言語素材を手に入れ、客観的な言語事実に基づき、誤用に関わる各構文の統語的制約と意味的制約を考察する。それにより、学習者の産出した文がなぜ誤用と見なされたのかを解明する。加えて、中国語の受身文の使用条件と比較対照し、学習者の誤用がどのようなメカニズムで生起するかを解明する。
- iii 誤用メカニズムに基づき、日本語教育現場における受身文の指導法の提言を試みる。

本研究の進捗状況は以下の通りである。

① 誤用データの有効性が検証済み

投稿論文の「『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』のデータ有効性の検証—受身文の誤用を中心に—」にて、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』のVer. 6とVer. 11の学習歴1年～5年及び7年における受身文の誤用を対象とし、誤用のパターンと傾向に変化があるかについて考察した。その結果、コーパスのデータは顕著に増加されたものの、誤用パターンと誤用分布は両バージョン間に大きな変化が見られず、数値的安定性が見られるため、本研究で使用している受身文の誤用データの有効性が示された。当該論文は『日语偏誤与日语教学研究』第6号に刊行されており、2022年8月に日本語誤用と日本語教育学会の学会賞二等賞を受賞した。

② 2022年に中国語で「日语被动句的偏误研究（日本語の受身文の誤用研究）」を題目に日本語学習者向けの参考書を作成した。顕著な誤用パターンを取り上げ、4章53節に分けて受身の誤用に関する各構文の使用条件の明確化を目指すものである。当該参考書は査読済みで、浙江工商大学出版社に入稿済み、刊行待ちである。

③ 誤用例を精査し、日本語学の従来 of 先行研究でまだ説明できない言語現象を取り上げ、論文を作成し、学会発表でフロアの研究者から意見をいただき、論文を修正して投稿する。例えば、「奈良時代に完成された『日本書紀』には「然も彼の地に、多に螢火の光輝く神」という言葉が<書いてある→書かれている>。(学部4年生/学習歴3年半/卒論)」といった誤用を取り上げ、「存在構文における『てある』と『(ら)れている』の誤用に関する一考察」

をテーマに2022年度日本語教育と日本学研究国際シンポジウムで発表した。

- ④博士學位論文で、動詞の類型と日中両言語の対応・非対応という二つの面から誤用例を統計し、「(ら)れる」形式の受身表現の誤用傾向を明らかにした。そして、誤用に関わる各構文の統語的制約、発話場や文脈に課せられる意味的制約と話者の事態の捉え方を分析した。うえ、中国語の有標の受身文との対照研究を通し、学習者の誤用メカニズムを解明した。また、迂言的受身表現の誤用に関して、「(ら)れる」→～を受ける」、存在を表す「である→(ら)れている」という誤用に絞って、意味的に類似している構文の相違を解明した。加えて、中国語の「被」構文と迂言的受身表現、または存在文との対照研究を通して、学習者の誤用がどのようなメカニズムで生じたかを解明した。そして誤用メカニズムに基づき、日本語教育現場における受身文の指導法の提言を試みた。

⑤進行中の研究

- ア.「ネット、雑誌、図書館の利用カードなど、契約を結ぶとき、全部一年単位だ。今面白いことが思い出された→を思い出した>!!(日本語教員/学習歴18年半/作文)」といった誤用例を手掛かりに、従来の先行研究で述べられている「自然に起こる動きや思考、感情などを表す」自発構文と、そもそも意志性が低いため自然に起こる動きや思考を表すことができる思考動詞の能動文の間に、どのような相違があるのかという疑問を解明するために、「思考動詞の自発的受身の使用条件に関する一考察」をテーマに日本語学会2023年春季大会の口頭発表(5月20日、採用済み)を行う。
- イ. 学習者作文コーパスから抽出した誤用の全体数2,696例のうち、無情物主語受身文の誤用が1,742例あり、全誤用数の64.6%を占め、最も顕著な誤用パターンであることが分かった。他動詞、非能格動詞、非対格動詞という動詞分類及び受身文の意味機能の分類を踏まえて誤用例をパターン化した。その結果、無情物主語受身文の誤用が1,742例あり、全誤用数の64.6%を占め、最も顕著な誤用パターンであることが分かった。①「非対格動詞受身と非対格動詞の誤用」、②「非対格動詞と他動詞受身の誤用」、③「他動詞と他動詞受身の誤用」という誤用に分けられる。誤用数が③>②>①という順位であること、各種類の誤用の要因は統語レベルと意味レベルでそれぞれ異なることが分かった。さらに、中国語の有標の受身文の使用条件との相違を考察した結果、日中両言語の受身の使用は発想的に異なることが明らかになった。これらが原因で、行為者を視野に入れない場合に受身の過剰使用、行為者を背景化すべき場合に受身の不誤用が生じやすいと考えられる。そこで、「無情物主語受身文の誤用メカニズムの解明及び指導法の提案—学習者作文コーパスの誤用データに基づいて—」をテーマに、日本語教育学会2023年春季大会の口頭発表(5月27日、採用済み)を行う。
- ウ.「『受身文+ことができる』の誤用に関する一考察」をテーマに2022年第46回日中対照言語学会春季大会で口頭発表した。また「中国語母語話者日本語学習者の「～化になる→～化される」の誤用に関する一考察」をテーマに、2022年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウムで口頭発表した。フロアの研究者からいただいたご意見を踏まえて論文を修正して投稿する。

本研究では誤用を手掛かりに興味深い課題が数多く見付き、指導教官をはじめ、たくさんの方からご指導をいただきました。心から感謝しております。最後に改めて各方面で援助して下さった関西学院大学大学院に厚く御礼申し上げます。